

人に仕事を教えるということ

法律事務所職員 鈴木 智恵

私の勤める法律事務所は現在弁護士6人、事務局5人である。事務局は正規職員が私だけで、あとはアルバイトである。

◇◇◇ 急激に変わった事務所内での立場

事務所では、私が唯一の正職員であり勤務年数もいちばん長いので、事務局長的な立場になる。徐々にそういう立場になればよかったのだが、ここ1～2年で急激に自分の置かれている立場が変わっていった。明確に事務局長とは位置づけていないが、そのような立場になって9か月間、アルバイトの人に仕事などを教えたり、また、一緒に考えて仕事をしてきた。

◇◇◇ まずは自身が仕事のやり方を再確認

人に仕事の指示をする立場になって気づいたことがある。まず、自分がいかに今まで、あやふやに仕事を覚えてきたかということである。以前は、「これどうやるんだっけ?」と聞けばすぐに答えが返ってきたが、今はそういう状況にない。仕事を教えようと思ったとき、あれ?これでよかったかなと思うことが多々あった。人に分かりやすく説明するためには、まず自分が理解をしていないと教えられない。きちんと調べて、自分の中で考えをまとめてから説明を始めることを心がけるようになった。

それから、事務局ひとりひとりの能力が違う中で、どの仕事を誰に割り振るかが重要であるということである。それにより、仕事の処理量が変わってくる。仕事の割り振りがうまくいかなかったときはなんとなく気持ちが悪い。逆に、仕事がうまく、きれいに処理できたときは達成感がある。自分の能

力と仕事の処理能力向上のためにこれからも努力をしていきたいと思う。

◇◇◇ 先輩の言葉を後輩へ伝える

事務局の重要な仕事の1つとして電話の応対がある。

裁判所、依頼者、顧問先、相手方、債権者、セールスなど、様々な人からの電話がかかってくる。弁護士によっては、接客中は電話を繋がないなどのルールがあったりする。慣れればどうってことないのだが、最初は、分からないので大変である。

裁判所からの電話は、早口だったりしてなかなか聞き取るのに苦労する。「ブンショソウフショクタク」(文書送付嘱託)ってどう書くんですかとか、家裁の事件番号で平成16年“イエイッ”(家イ)って言われたんですけど“イエイッ”ってどう書くんですかなどと聞かれる。今はあたり前に聞いていることが、初めて聞く人には分からないものなのだと感慨深かった。

私も入所したばかりのころ、裁判所から「新件の期日を入れたい」との電話を何本か受けて、“親権”に関する訴訟が多いんだと思った記憶がある。また、先輩事務局に「電話は顔が見えないので、より丁寧に対応しなくてはいけないよ」と言われたことも思い出した。

そういえば、この先輩の言葉、他の事務局には、話していないかもしれない。早速、自分にも言い聞かせる意味も込めて、みんなに伝えよう。